

「ただ見る、ただ撮り続ける、美は見て感じることによるのみ存在する」

白岡順+共鳴する8名の写真家

蒔田恵理、山本昌男、木村朗子、山内悠、
松岡一哲、高橋宗正、大山友輝朗、本杉郁雲

ものがたり

徒党を組むのが何かと慣例になっている日本の写真界にあって、白岡順(1944-2016)と山本昌男(1957)は、それぞれの場所で自分の領域を開拓していた。(好んだわけではないだろうが結果として二人は孤高であったかもしれない)二人は日本国内よりもむしろ海外に軸足を置いた作家活動を続けてきた。ある時は空港で、またある時はイタリアの美術館でのグループ展で、両者は偶然に出会うことがあった。そして山本は白岡に対して何か運命的なもの、また彼の作品については、その理性的でありながら感情が染み出すような凛々しい画面に引かれるものを感じていた。

1993年、山本は1枚のはがきをもらう。差出人は大山友輝朗。山本がワンポイント講師として出向いた写真専門学校で生徒として在籍していた大山の作品を山本が講評したことで、大山は自分の向いている方向に近いものを山本に感じた。その後、度々の交流によって大山は自身の作品精度を高めていく。

2000年、青山のspiralで山本の個展が開催された、木村朗子がこの展示を見て感じるところがあり山本に手紙を出した。それから共通する感性を持つもの同士の長年の交流が始まる。また木村(1971)は山本作品に出会う以前に白岡作品にも衝撃を受けていた。

2014年、高橋宗正(1980)は韓国大邱写真ビエンナーレに招待されていた。そこで同じく招待された山本と出会う。高橋は2011年の震災をテーマにしたプロジェクトで世界にデビューをしていたが、その先の作品をどうするか、また写真を撮りながら、どうやって生きていくかを模索していた。そこで、写真作品の販売のみで生きている山本に興味を湧き接近した。

高橋の友人である、山内悠(1977)と松岡一哲(1978)も、国内で注目を浴び活躍は

していたが、もっと突き詰めた作品作りがしたい、でも、そういった作品を認めてくれる場がない、という共通のジレンマを抱えていた。日本国内では芸術に対する関心度が低いことが彼らを苦しめていた。海外の市場に受け入れられている山本の話の聞きに、彼らは八ヶ岳の山本スタジオに集まってきた。デビューから海外での活動だったため、国内には親しい写真関係者が少ない山本にとって、若き写真家たちは新鮮な刺激を与えてくれた。

山本が白岡に感じた運命的な何か、は、やはり的中し、白岡、蒔田(1968)夫妻は、2016年に八ヶ岳に自宅を構え引っ越してきた。と同時に白岡は亡き人となった。蒔田恵理は“白岡哲学”の継承者であると同時に、また白岡亡き今、彼女独自の新たな世界が展開され、主にヨーロッパにて評価が高まりつつある。

特筆すべきは、2019年は白岡順の展示が2箇所(サラゴサの画廊 Spectrum Sotos, ログローニヨの画廊 Casa de la Imagen)で開催されている。白岡の作品は、彼の生前にもすでに Spectrum をはじめスペイン各地で展示されたことがあった。あの気品の黒と白がスペインの方々の共感を既に呼んでいたことを確信した。

ここ数年、山本の作品制作を身近で支えながら、本人も独自の世界を模索しているのが、メンバーの中で一番若い本杉郁雲である。

この8名は、群れるのではなく、自然と必然と、感覚の糸によって、遠くゆるく繋がっている。40年代~80年代生まれの8名の日本の写真家の世代を超えた美意識を提示したい。これは今までヨーロッパの方々によって定義づけられた「日本写真」を、良い意味で裏切る作家たちであると信じている。

山本玲子